

太宰治の女性像

——晩年を中心として——

青 木 京 子

〔抄録〕

太宰治の前期の女性についての論考は、伝記的事実を絡めさせたものが殆どで、多くの作品を統括したようなそれは、浦田義和氏の「前期の女性像」等にわずかに見られるだけである。しかも、それらは前期の女性像の特徴を概括的に述べられてはいない。詳細に叙述されてはいない。

前期の女性像は、柳田國男の民族学に見られるような〈異類〉の女性が多く描出されている。他には、凌辱される女性や水に〈沈む〉女性、母親が初めから不在であったり、病没したりする女性が多数を占める。さらに、〈無学〉の女性や、バー等、店で働く〈下層〉の女性も頻出している。が、「優し」く、〈美

し〉い〈永遠〉の母親像はわずかに見られるだけである。

このように、『晩年』を中心とする前期の女性像の特徴は、豊かな女性というより、薄幸な女性が多い。しかも、それらは十代の女性に集中している。

太宰治は、思春期ともいわれる十代の、〈辺境〉の〈劣悪〉な女性に視点を多く注いでいる。それらの精神は〈美し〉く、〈高貴〉でさえある。

キーワード…〈異類〉の女性、〈辺境〉の〈劣悪〉な女性、精神の〈高貴〉な女性

はじめに

一 〈異類〉の女性

二 〈傷〉つく女性

三 母親像

1 希薄な母像

2 〈永遠〉の母

四 〈沈む〉女性

五 〈下層〉の女性

1 〈無学〉な女性

2 店で働く女性

はじめに

太宰治の前期の女性像についての論考は、「魚服記」、「道化の華」、「めくら草紙」等を取り上げたものが散見できる。が、それらは、田部あつみの「鎌倉心中事件」を背景にしたような伝記的事象を絡ませた論文が殆どで、多くの作品を統括して論じたような論文は、浦田義和氏の「前期の女性像」等にわずかに見られるだけである。氏の論考では前期の女性像の特徴が概括的に述べられてはいるものの、前期における全ての作品を綿密に検討した上で叙述されたものとはいえない。

そこで本稿では、太宰治の『晩年』の作品全体を視野に入れた上で、彼の前期の作品における女性像の特色を探ってみることにする。

一、〈異類〉の女性

太宰の前期の作品には、津軽地方の山間奥地の〈異界〉に位置する女性、すなわち〈異類〉の女性が多く描かれている。

太宰の生家、津軽の金木には、作品「思ひ出」に語られているよう

に、幼い主人公が叔母により、「地獄極楽の御絵掛地を見て、道德を教えられた」というくだりが見られるが、その雲祥寺には、「地獄極楽の御絵掛地」があり、その後方には、「津軽的巫呪の中心ともいふべきいたこの名所、川倉地蔵」が控えている。

「イタコ」とは、「東北地方で口寄せをする巫女」のことで、「客の依頼に応じて、死者や神仏の意を語り伝え、一時的に任意に死者や神仏に自分の体を貸す霊媒者」であるといわれている。

津軽には、そのいたこの口寄せの山とされる「恐山」があり、それは、死者が行くと信じられている山で、地形の異様なことから命名されたといわれている。このように、津軽は、伝統的な習俗と信仰をもった土俗的な地であるが、太宰治の作品には、霊的な〈禁忌の女性〉をはじめ、山間奥地で「異界」を形成している女性が、多く描かれている。

「魚服記」は、『雨月物語』の「夢応の鯉魚」に取材したことを、随想「魚服記に就て」に記しているが、柳田国男の『山の人生』（大一五・一一）の巻頭、「山に埋もれたる人生ある事」は、山間僻地の風土における「炭焼き小屋」での貧しい生活空間、飢えた少年、少女と父親「阿爺」の人物設定（母不在は同じ設定、しかし少年が付加されている）、滝からの身投げの場面が組みこまれていて、妙に重なる部分がある。

「魚服記」の舞台は、「ふつうの地図」にも載っていないような、本州北端の辺境の地で、金木からそう遠くない、「ぼんじゅ山脈の馬禿山」である。そこは、「陰」の景色が良く、全くの過失から、「死者」

の出た不吉な風土である。滝壺は「絶壁」で、谷川が岩を噛みつつ流れ、滝の「とどろき」に、羊歯類はしじゅう「ぶるぶる」そよいでいて、「恐山」を思わせる怪奇的な空間である。

十五の娘、スワと、炭焼きの父が住むのは麓の村から二里も離れた山中で、小屋は、他の小屋から余程離れたところに建てられていて、《違ふ土地のもの》、いわゆる柳田国男のいう《異界》の住人である。スワと父親からは、「平野の住民と区別」された、《異界》の《山女》と《山人》が想起させられる。

スワを茶店にひとり置いてても心配はなかつた。山に生まれた鬼子であるから、岩根を踏みはづしたり滝壺へ吸ひこまれたりする氣づかひがないのだつた。天氣が良いとスワは裸身になつて滝壺のすぐ近くまで泳いでいつた。泳ぎながらも客らしい人を見つけると、あかちやけた短い髪を元氣よくかきあげてから、やすんで行かせえ、と叫んだ。

スワは、「はだし」で歩く《鬼子》であり、天氣が良いと「裸身」で泳ぎ、《妖怪》のような「あかちやけた髪」をしている。平野の農耕民とは系譜の異なる《山女》そのものである。

遊山の人影を見たスワが「やすんで行かせえ」と大声で叫んでも、美しい声が滝のとどろきにより、かき消されてしまう「カオスの闇」のような世界は、ある種の危険な空間ともいえる。それは、「黄昏時」になると、父親が娘を迎えにくるというくだりに、一層増幅される。

「黄昏」とは、柳田國男の「かはたれ時」¹⁰の項によると、「雀色時」ともいい、人を識別できない《危険な時》を示す。そんな《危険な時》

は、後に、父親によつて犯されるというエピソードの伏線だと考えられるが、このような《異界》に育つたスワも、この滝へやつてきた色の《白》い都の学生の「死」に遭遇することにより、自我がめざめはじめる。色の《白》い都の学生とは、スワのような《鬼子》とは対極にある階級の人物として、象徴的に造形されているが、彼女はだんだん思案深くなり、少しずつ「大人の女性」に変化してゆく。炭焼きの暮らししか知らない父に向かって、スワは、

「お父」

スワは父親のうしろから声をかけた。

「おめえ、なにしに生きでるば」

と問いかけるようになる。父の目に写るスワの反抗的な言動に、一時は怒りをあらわにするが、「一人前のをんな」になつたのだと堪忍してやるのである。

盆が過ぎると、スワのいちばんいやな季節がはじまる。

よるになると風がやんでたゞしんと寒くなつた。こんな妙に静かな晩には山できつと不思議が起るのである。天狗の太木を伐り倒す音がめりめりと聞えたり、小屋の口あたりで、誰かのあづきをとぐ氣配がさくさくと耳にいたり、遠いところから山人の笑ひ声はつきり響いて来たりするのであつた。

「天狗」の太木を伐り倒す音が聞えたり、あづきをとぐ氣配が耳にいたり、《山人》の笑ひ声はつきり響いてきたりする《不思議》な「異空間」である。大人の女性になつたスワは、一日中小屋にこもり、めずらしく髪を結い、たけながを結んでみたりする。このような

「花嫁姿」に変身させたような設定は、すぐその後で、父親に犯されることへの予兆だと考えられる。

疼痛。からだがいびれるほど重かった。ついであのくさい呼吸を聞いた。

「阿呆」

スワは短く叫んだ。

ものもわからず外へはしつて出た。

疼痛の意味さえ知らない少女は、父という同族の、最も信頼すべき異性によって、無暫にも凌辱されてしまう。ここでは、都から隔絶された〈異界〉の女性を巧みに表出するのに成功している。山の民は、山の民とだけ、同じ山の民でも、同一の職種だけの結婚だけしか許されなかったのである。

里から孤絶された、混沌とした領域での禁忌とされた時間。異空間での「近親相姦」は、いわば、起こるべくして起こった必然的な悲劇であったのである。

この作品は、「平野の民」から〈異人〉として卑賤視され、通婚を拒否された民族へ、太宰が哀切な眼差し、道徳的な視点で描写されたものだと思う。スワは、山で育った〈純粹無垢〉な少女ゆえに、水の中に沈まなければならなかったのである。

〈異類〉の女性は、「陰火」の尼にも見出せる。その尼は、或る晩に「夜伽」にやつて来て、やがて「人形」になっていく話である。

頭は青青してゐて顔全体は卵のかたちに似てゐた。頬は浅黒く、粉つぽい感じであつた。眉は地藏さまの三日月眉で、眼は鈴をは

つたようにぱつちりしてゐて、睫がたいへん長かった。鼻はこんもりともりがつて小さく、両唇はうす赤くて少し大きく、紙いちまいの厚さくらゐあいてゐてそのすきまから真白い齒列が見えてゐた。（略）僕は尼の手を見てゐた。爪が二分ほど伸びて、指の節は黒くしなびていた。

「あなたの手はどうしてそんなに汚いのです。」

尼は「浅黒」く、「爪が伸び」ていて、ひどく〈汚い〉と造形されている。「汚いことをしたからです」。そういつて醜い自身の姿に脅え、おののく「蟹の話」を始める。「仏様が夜遊びにおいでになります。毎晩ですの。」不吉な「蟹の話」や「仏」からは、呪術的な憑依、すなわち霊がこの世にやつてきて依りつくような「亡霊」を想起させる。卵の顔は「貉」を連想させるし、「死臭」をいっぱい漂わせた白象に跨つてやつて来た「如来」は、黄泉の使者ではなからうか。その「如来」は退去寸前にくしゃみをする。すると直ぐに透明になり、雲散無消してしまふ。尼は「地藏様の三日月眉」をし、「悪臭」を放っている。〈黒〉は〈都会〉の〈白〉に對置する〈田舎〉の色であり、伸びた爪やうす赤く大きい唇は〈妖怪〉を思わせる。醜い姿、不吉な情景、仏や如来の出現、不思議な出来事等は、全て死霊を媒体としている口寄せの〈巫女〉の世界を喚起させる。さらに、「地藏様の三日月眉」は金木の川倉地藏の眉を想起させる。「悪臭」というのも、やはり、農耕民とは区別するための表現であると思われる。これらのことから、「陰火」の（尼）は〈異類〉の女性のカテゴリに属するといえる。

その他には「葉」の婆様の「死に顔」や「夏木立の影がうつらんば

かり美し」い「白蛾の御両頬」等、〈幽霊〉を思わせる造形が見られ、「玩具」の祖母の奇妙な「死」と「悪臭」等とともに、〈異類〉の女性が叙述されているといえる。

これらの女性はいくとも「卑しく汚れた血」によって、異端視されたのではなく、職業や環境によって、人為的にしたてあげられ、卑賤視された人間である。

太宰治はここに焦点を当て、人間の哀切さを描写している。彼は、このことにより、社会の闇の部分をつかび上がらせようとしたのである。

二、〈傷〉つく女性

太宰治の前期（昭和八年～十二年）の作品には、〈傷〉つく女性が多く描かれているが、彼の処女作である「列車」のテツさんや、自伝作品とも呼ばれている「思ひ出」のみよ等がその典型として挙げられる。彼女達は、津軽出身の女性であり、「痩せ」て「色が黒」く、〈無学〉で〈愚鈍〉な〈田舎〉の女性として造形されている。家は〈貧しく、職業も女中や小間使い等の奉公人や、若妻などがほとんどである。津軽は太宰治の出身地でもあり、身内の女性に視点を当てた作品が多いが、特に女中等の奉公人や若妻が、〈虐待〉されたり、〈凌辱〉されたりし、東京などの都会に出奔しても、〈零落〉してゆく女性が多くなり多く描かれている。

前期の作品には、〈田舎〉の女性の悲劇を扱った作品が多い。〈田舎〉

出身ではないが、〈傷〉つく女性として構築された作品に、「めくら草紙」がある。そこで傷つけられるのは、マツ子である。

マツ子は「ことし十六」で、「鼻も低い」し、「美しい面貌でなく、ただ、唇の両端が伶俐さうに上へめくれあがつて、眼の黒く大きいのが取り柄」の娘である。口述筆記させれば「一枚に平均、三十箇くらゐづつの誤字や仮名ちがひ」をする「愚か」な少女でもある。原稿に写すにも間違ひだらけで、容姿もさえない少女ではあるが、口元に「伶俐」さも窺え、眼の黒く大きい、〈純粹〉な瞳の少女を感じさせる。いわゆる「知的」な少女ではないが、主人公の悪態に対しても、「あなたは尊いお人だ。死んではいけません。誰もご存じないのです。私はなんでもいたします。いつでも死にます。」と懸命で、〈清純〉そのものである。それゆえに憎めず、主人公は、「いのちにかけて大切ににして居る〈聖〉なる少女なのである。」

しかし、この無邪気なマツ子も、「私、十八になれば、京都へいつてお茶屋につとめるの。」と、後には〈汚〉される運命にあることを予兆している。当時にあつては名声のある「私鉄鉄道の駅長」を父親に持つ少女であるが、こんな少女でさえも、「気の弱い女性ゆえに、御茶屋に請われる身となるのである。そして、主人公の創作上でも、「私はマツ子に傷をつけた」と、〈傷〉つく女性として造形される。「列車」のテツさんや「思ひ出」のみよのように津軽出身の〈田舎〉娘ではないが、やはり、〈傷〉つけられ、運命に翻弄させられる少女として造形されているのである。

このようなカテゴリーの作品に「陰火」の「紙の鶴」がある。そこ

でも主人公の妻が犯される。冒頭から、「おれは君とちがつて、どうやらおめでたいやうである。おれは処女でない妻をめぐつて」などと、〈傷〉つく女性が暗示されている。その妻は、さらに次のように造形されている。

おれは妻をせめたのである。このことにもまた三夜をつひやした。妻は、かへつておれを笑つてゐた。ときどきは怒りさへした。おれは最後の奸策をもちゐた。その短篇には、おれのやうな男に処女がさづかつた歓喜をさへ書きしるされてゐるのであつたが、おれはその箇所をとりあげて、妻をいぢめたのである。（略）無学の妻は、果たしておびえた。しばらく考へてから、たうとうおれに囁いたのである。おれは笑つて妻を愛撫した。（略）ああ、妻はしばらくして、二度、と訂正した。それから、三度、と言つた。（略）妻は、つひに、六度ほど、と吐き出して声を立てて泣いた。

この妻は、「列車」の主人公、汐田の妻と同じように〈無学〉と叙述されている。彼女は夫の言葉を一心に信じてしまう「純真」な面があり、夫の執拗な奸策に耐えかね、夫以外の男に〈傷〉つけられたことを自供するのである。「明る」く、「純粹」で〈聖〉なる女性として、愛情を持った描かれ方をしてはいるが、やはり、〈傷〉つく悲劇の女性として造形されている。

「道化の華」の看護婦の真野も〈傷〉つく女性として描かれている。

真野といふ二十歳ぐらゐの看護婦がひとり附き添つてゐた。左の眼蓋のうへに、やや深い傷痕があるので、片方の眼にくらべ、左の眼がすこし大きかつた。しかし、醜くなかつた。赤い上唇がこ

ころもち上へめくれあがり、浅黒い頬をしてゐた。ベッドの傍の椅子に坐り、曇天のしたの海を眺めてゐるのである。葉蔵の顔を見ぬやうに努めた。気の毒で見れなかつた。

彼女はほぼ「二十歳」の若い看護婦であるが、左眼に、「やや深い傷痕」を持つてゐる。両目の大きさは違うが、それでも「醜くなかつた」と表現している。真野は〈心中〉で生き残つた葉蔵の心境を考え、彼の顔を見ぬやう、優しい心遣いを見せる。又、看護婦になりたてのころ、はじめて自殺者を看護した時の失敗談を「素直」に白状する。さらに彼女は、「つまましい」、「率直」、「正義派」、「おだやか」等、「つましやか」で、〈聖〉なる女性としての造形がなされており、爽やかな「松葉模様の羽織」と〈都会〉的な〈赤〉い「シヨオル」の似合う愛らしい女性として描かれている。それゆゑ、三歳時の火傷の傷痕も「気にならない」女性なのである。

〈異類〉の女性として、先述した「魚服記」のスワも同族の父親に〈傷〉つけられ、水辺に身投げする。〈近親相姦〉ではあるが、これも、一種の〈傷〉つく女性の悲劇を扱った作品である。又、「彼は昔の彼ならず」の少女、てい子も、「胸像」のモデルとして造形され、〈汚〉れた女性として描かれているのではなからうか。しかし、彼女もやはり、恥じらいを見せる〈聖〉なる女性として描かれ、哀感を持って眺められている。

このように、太宰治の前期の女性性は〈傷〉つく女性、〈傷〉持つ女性、〈汚〉れた女性が多く描かれている。しかし、あくまでもその女性達は〈清純〉で〈聖〉なる女性、外貌で犯されても内面の美しい女

性として描かれている。それは太宰治が、それらの女性に暖かい眼差しを注いでいるからである。

三、母親像

1 希薄な母像

太宰治の前期の女性性は、病死する母親等希薄な母像が頻出してゐる。まず、「虚構の春」では、「私の生みの老母が、私あるがために、亡父の跡を嗣いで居る私の長兄に対して、ことごとく面目を失ひ、針のむしろに坐つた思ひで居る」等と、希薄な母像が叙述されている。又、「陰火」の「誕生」の母も、主人公の工場が倒産して一年後に、亡くなってしまう。

それから一年すぎて、彼の母が死んだ。彼の母は父の死後、彼に遠慮ばかりしてゐた。あまりおどおどして、命をちぢめたのである。母の死とともに彼は寺を厭いた。母が死んでから始めて気がついたことだけでも、彼の寺沙汰は、母への奉仕を幾分ふくめてゐたのである。／母に死なれてからは、彼は小家族のわびしさを感じた。

この作品でも、母の影は希薄である。權威の象徴としての夫が亡くなると、実の息子にまで遠慮して「おどおど」している。そして、迷ひには命まで縮めてしまふのである。

このようなカテゴリーの作品に、「葉」がある。ここでは、婆様の存在感が深いのに対して、母親は次のように語られている。

もつとも私の母様は御病身でございました故、子供には余り構うて呉れなかつたのでございます。父様も母様も婆様もはんたうの御子ではございませぬから、婆様はあまり母様のほうへお遊びに参りませず四六時中離座敷のお屋にはかりいらつしやいますので、私も婆様のお傍にくつついて三日も四日も母様のお顔を見ないことは珍らしいございませんでした。

ここでは母は、主人公の母親の役割は果たしておらず、婆様が代理を務めている。母は病身で、存在そのものも希薄であり、本当の子供ではない等と、家族としての印象もあまりない。「玩具」の母像も、父は「憤怒の鬼」と造形されるが、母は「ひいといふ絹布を引き裂くやうな叫びをあ」げ、「哀訴」して「泣」く、ひ弱な女性である。「ロマネスク」の「嘘の三郎」の母親も「亡き母」とし、「三郎は母を知らなかつた。彼が生まれ落ちるとすぐ母はそれと交代に死んだのである。いまだかつて母を思つてみたことさへなかつたのである」とその像は希薄である。「思ひ出」でも、主人公は乳母の乳で育ち、母には「親しめなかつた」、「小学校二、三年まで母をしらなかつた」、「母への追憶わびしい」と、その存在は薄い。むしろ、「私の泣いてゐるのを見つけた母は洋服をはぎとり私の尻をびしやびしやぶつた。」「私の顔の悪いのを真面目に言つた。」「弟をなぐつて母に叱られ、うらんだ」等と、「叱る」母としての造形がなされている。

このように、前期の女性の中でも特に母親は、存在していてもすぐ病死したり、息子の顔色を窺つておろおろし、最後には亡くなつてしまふパターンが多い。これらの母親像は極めて希薄であるが、太宰の

中期の作品では破産すると間もなく死んでしまう「水仙」の母や、『津軽』の生みの母、さらに後期では「冬の花火」や『斜陽』の死にゆく母像に継承されてゆく。

母親ではないが、「ロマネスク」の「喧嘩次郎兵衛」の主人公の嫁も、結婚二ヶ月後には、「ころりところん」で、あっけなく亡くなってしまう。ここにも、前期の女性の薄幸な人生が窺える。

その他、前期の女性には母親がもとと不在で全く描かれていない作品も多い。先述の「魚服記」では、父親と娘の父子家庭であり、母親は最初から欠落しているし、「ロマネスク」の「喧嘩次郎兵衛」では、父親と子ども十四人の家族であるが、母親は全く描かれていない。これは中期の「葉桜と魔笛」や「女性徒」に、又、後期では「人間失格」にその傾向が見られ、主人公の大庭葉蔵が、「女性」につき纏われて「失格」してゆく物語に通じるものである。

2 〈永遠〉の母像

前期の女性で、「優し」く〈美し〉い〈永遠〉母親像が見られるのは「思ひ出」の叔母と姉、「喝采」の姉、「めくら草紙」の母親等である。

私は叔母とふたりで私の村から二里ほどはなれた或る村の親類の家へ行き、そこで見た滝を忘れない。（略）その男の人が私にそのさまざまな絵馬見せたが私は段々とさびしくなつて、がちや、がちや、と泣いた。私は叔母をがちやと呼んでゐたのである。叔母は親類のひとたちと遠くの窪地に毛氈を敷いて騒いでゐたが、

私の泣き声を聞いて、いそいで立ち上がった。（略）またある夜、叔母が私を捨てて家を出て行く夢を見た。叔母の胸は玄関のくぐり戸いつばいにふさがつてゐた。その赤くふくれた大きい胸から、つぶつぶの汗がしたたつてゐた。叔母は、お前がいやになつたとあらあらく眩くのである。私は叔母のその乳房に頬をよせて、さうしないでけんせ、と願ひつつしきりに涙を流した。叔母が私を揺り起こした時は、私は床の中で叔母の胸に顔を押しつけて泣いてゐた。（略）

叔母についての追憶はいろいろとあるが、その頃の父母の思ひ出は生憎と一つも持ち合せない。曾祖母、祖母、父、母、兄三人、姉四人、第一人、それに叔母と叔母の娘四人の大家族だつた筈であるが、叔母を除いて他のひとたちの事は私も五六歳になるまでは殆ど知らずにゐたと言つてよい。

「思ひ出」の叔母は、主人公から「がちや」と呼ばれ、乳母でもあり、主人公を庇護する代理母の役割を果たしている。泣く時は叔母の胸に押しつけ、叔母の追憶はあるが、父母の記憶は全くない。父母も祖父母もいる大家族であるが、叔母以外の人たちのことは殆ど知らないし、思い出さえ存在しない。主人公にとって叔母は母そのものである。「思ひ出」の中では上の姉にも「優しさ」が窺われる。帰郷する時の弟達のおみやげがないと、「何もなくてえ」と顔を赤くして恐縮する。その時の姉の優しい心使いに主人公は、「胸をしめつけられる」思いをするのである。これら二人の女性は母親の代理として打ち出されてくるが、実際の「親しめない母」や「叱る母」に代わり、細やか

な愛情を注ぐ存在として登場してくる。これは、中期の「新樹の言葉」の乳母、「つる」や「無憂無風」の平和な安堵感を与えてくれる『津軽』の「たけ」に通じる豊かな母親像である。「優し」く母性的な母像は「めくら草紙」のマツ子の母親にも見出せる。その母親は「奥さま」と敬語表現で呼ばれ、「感じのいい奥さま」と上品である。肌は「つやつや」と瑞々しく、ふくよかで、顔は「小造り」で愛嬌がある。さらに、しっかりといて「話をするときを忘れる」母親の典型のような女性像である。このような傾向は、後期の『バンドラの匣』の「永遠の女性」、竹さんに繋がる女性像である。この他にも、「道化の華」のろ号室の付き添いの母親に、「優しさ」が見られるし、「彼は昔の彼ならず」の母親にも上品さが窺える。が、どちらかというと、前期の女性は、「明る」くて「優し」い「永遠」の母像はわずかに見られるだけで、その殆どの母親の存在は希薄である。

四、〈沈む〉女性

水に〈沈む〉女性も多く描かれている。

まず、「魚服記」のスワも、父親に犯され、水中に飛び込むが、情死するのは「道化の華」の園である。

その前夜、袂ヶ浦で心中があつた。一緒に身を投げたのに、男は、帰帆の漁船に引きあげられ、命をとりとめた。けれども女のからだは、みつからぬのであつた。その女のひとを捜しに、半鐘をながいこと烈しく鳴らして、村の消防手どものいく艘もいく艘もつ

ぎつぎと漁船を沖へ乗り出して行く掛声を三人は胸とどろかせて聞いてゐた。(略)女の死体が袂ヶ浦の波打発見された。短く刈りあげた髪がつやつや光つて、顔は白くむくんでゐた。／葉蔵は園の死んだのを知つてゐた。

園は主人公の心中の「みちづれ」になって死んだ女性であるが、看護婦真野の心中事件患者の体験談を耳にしたときも、「葉蔵は別なことを考へてゐた。園の幽霊を思つてゐたのである。美しい姿を胸に画いてゐた。」と、〈美しい〉女性として造形されている。園のことは、さらに、次のように述べられている。

銀座のバアにつとめてゐたのさ。ほんたうに、僕はそこのバアへ三度、いや四度しか行かなかつたよ。(略)

「(略)女は生活の苦のために死んだのだ。死ぬる間際まで、僕たちは、お互ひにまつたくちがつたことを考へてゐたらしい。園は海へ飛び込むまへに、あなたはうちの先生に似てゐるなあ、なんて言ひやがつた。内縁の夫があつたのだよ。二三年まへまで小学校の先生をしてゐたのだつて。僕は、どうして、あのひとと死なうとしたのかなあ。やつぱり好きだつたのだらうね。

主人公は心中相手の死を、単なる「情死」としないで、「生活苦」としている。ねじれた愛憎による死ではなく、「生活苦」の悲劇として、園を哀惜の情をもつて眺めている。あくまでも、その女性を美化しているのである。園は、主人公の友人達にも、「まだ耳についてゐる。田舎の言葉で話したいな、と言ふのだ。女の国は南のはづれだよ。」と「純粹」そのものの暖かい女性像が想起される。単なる心中

のみちづれの女性であっても、バアの女であっても、「美しい」女性として描かれている。

〈沈む〉女性には「狂言の神」にも叙述されている。

有夫の婦人と情死を図ったのである。私、二十二歳。女、十九歳。師走、酷寒の夜半、女はコオトを着たまま、私もマントを脱がずに、入水した。女は、死んだ。告白する。私は世の中でこの人間だけを、この小柄の女性だけを尊敬している。

（但し傍線引用は筆者とする）

主人公は、夫ある身の情死相手であっても有夫の「女」としないで「夫人」とし、「小柄」等と可憐なイメージで表記している。さらに「私は世の中でこの人間だけを、この小柄の女性だけを尊敬している」と言い切っている。その女性には、最初は三回も「女」と繰り返されるが、すぐに「人間」や「女性」となる。しかも性別を越えたところの、世の中全ての人類の中で、唯一、「尊敬」に値する「人間」なのである。

「虚構の春」においても、有夫の女の「情死」が扱われている。「私は、私を思つて呉れてゐた有夫の女と情死を行つた。女を拒むことができなかったからである。」と、今度は、有夫の夫人ではなく、「女」と叙述し、「女を拒むことができなかった」とあまり好意的には描かれてはいない。しかし、この作品の後方では、次のように描写されている。

鎌倉の海に知識人薬品を呑んで飛びこみました。言ひ忘れましたが、この女はなかなかの知識人で、似顔絵がたいへん巧かつた。

心が高潔だったので、実物よりも何層倍となく美しい顔を描き、しかも秋風のやうな断腸のわびしさを持つニユアンスを必ず書き添へて居りました。画はたいへん実物の特徴をとらへてゐて、しかもノオブルなのです。

ここでも、この女性には「知識人」で、心が「高潔」であり、「情趣的」な女性として造形されている。彼女描いた画さえも「ノオブル」等と叙している。

その他「雌に就いて」にも、「情死」を企てて死なせた女性が描かれているが、この女性も空想上の「憧れの女性」、「理想」の女性として叙述されている。これらの女性は、やはり、限りなく〈美し〉く、〈聖〉なる女性として描かれているのである。

五、下層の女性

1 〈無学〉の女性

前期の女性には〈貧し〉く、〈田舎〉育ちの〈無学〉な女性が多く描かれている。

先述の「列車」のテツさんも〈貧しい〉育ちの娘であり、主人公の「私の妻」も或る〈無学〉な〈田舎女〉や〈貧しい〉育ちの女、〈のろま〉な妻等と、〈愚鈍〉さを強調したような描かれ方をしている。「陰火」の「紙の鶴」の妻も、〈無学〉の妻と造形され、だらしなく、〈卑俗〉で「生野暮」な妻像である。「葉」にも〈無学〉な母と〈無学〉な花嫁が存在する。その母親像は以下のように叙述されている。

私たちは山の温泉場であてのない祝言をした。母は、しじゅうくつくつと笑つてゐた。宿の女中の髪のかたちが奇妙であるから笑ふのだと母は弁明した。嬉しかったのであらう。無学の母は、私たちを炉ばたに呼びよせ、教訓した。お前は十六魂だから、と言ひかけ自信を失つたのであらう、もつと無学の花嫁の顔を覗き、なう、さうでせんか、と同意を求めた。母の言葉は、あたつてゐたのに。

ここには、〈無学〉ではあるが、些細なことで屈託なく笑う母親の姿が印象的である。笑い声の「くつくつ」という表現からは、川端康成の十四歳の「踊り子」が「ことごと」笑うように、少女のような「純真」さが窺える。教養は無いが、息子の門出を素直に喜び、祝福している母親の感情が如実に表出されている。「お前は十六魂だから、と言ひかけて、自信を失つたのであらう」や、最後の「母の言葉は、あたつてゐたのに」という表現からは、親であっても〈無学〉ゆえに自信がもてないで遠慮がちにしている母親に対し、主人公は哀感を覚えたのだらう。さらに主人公は、もつと〈無学〉の花嫁に対して同意を求めている。その思慮のなさに主人公は同情はしていても、決して馬鹿にはしていない。むしろ、このような母に対し、深い愛情を覚えているのであらう。

「逆行」の「蝶蝶」にも「老人の、ひとのよい無学ではあるが利巧な、若く美しい妻は、居並ぶ近親者の手前、嫉妬でなく頬をあからめ、それから匙を握つたまま声をしのはせて泣いた」と〈無学〉の妻が叙述されている。その妻は〈無学〉ではあるが、「ひとのよい」とされ、

「利巧」で「若く〈美し〉い女性として造形されている。居並ぶ近親者の視線に耐えかね、すすり泣く若妻の姿は可憐でさえある。やはり、〈無学〉であっても〈聖〉なる女性として描かれているのである。その他「猿面冠者」にも「育ちの〈卑しい〉妻」や「〈卑しい〉育ちの〈無学〉の妻」と、象徴的に描かれている。さらに、「虚構の春」にも〈卑しい〉女が叙述されている。これらの女性は殆どが津軽出身の〈田舎〉の女性であり、生家は〈貧しく〉て〈卑しい〉育ち方をしている。しかし、その心はどこまでも〈純粹〉で〈美しい〉。

太宰治は、〈貧し〉く育ちが〈卑し〉く〈無学〉の女性であっても、その精神は卑屈ではなく、むしろ〈明る〉く〈純粹〉で〈高貴〉でさえある、と考へているのではなからうか。

2 店で働く女性

太宰治の描く女性で代表されるのは、バーのマダムや茶店の女給等、店で働く女性である。前期では、まず、「ダス・ゲマイネ」の甘酒屋の給仕の菊ちゃんである。

私が講義のあひまあひまに大学の裏門から公園へぶらぶら歩いて出ていつてその甘酒屋にちよいちよい立ち寄つたわけは、その店に十七歳の、菊といふ小柄で利発さうな、眼のすずしい女の子がゐて、その様が私の恋の相手によくよく似てゐたからであつた。菊ちゃんは給仕の娘であるが、「小柄」で「利発」で「眼のすずしい」女の子と造形されている。さらに彼女は、次のように造形されている。

真赤な麻の葉模様の帯をしめ白い花の簪をつけた菊ちゃんが、

（略）私が近づいていつて、やあ、と馬場に声をかけたら、菊ちやんが、あ、と小さく叫んで飛びあがり、ふりむいて私に白い歯を見せて挨拶したが、みるみる豊かな頬をあかくした。（略）

「信じ切る。そんな姿はやつぱり好いな。あいつがねえ。」（略）

「僕のこの無精髭を見て、幾日くらゐたてばそんなに伸びるの？と聞くから、二日くらゐでこんなになつてしまふのだよ。ほら、じつとして見てゐなさい。髭がそよそよ伸びるのが肉眼でも判る程だから、と真顔で教へたら、だまつてしやがんで僕の顎を皿のやうなおほきい眼でじつとみつめるぢやないか。おどろいたね。君、無智ゆゑに信じるのか、それとも利発ゆゑに信じるのか。ひとつ、信じるといふ題目で小説でも書かうかなあ。AがBを信じてゐる。そこへCやDやEやFやGやHやそのほかたくさん的人物がつぎつぎに出て来て、手を変へさまざまにBを中傷する。それからAはやつぱりBを信じてゐる。てんから疑はない。安心してゐる。Bは男。つまらない小説だね。ははん。」へんにはしやいでゐた。

彼女は「真赤」な帯と「白い」簪の愛らしい装いをした少女で、清潔な「白い歯」の見える笑顔で挨拶をし、直ぐに赤面するような「純粹無垢」な少女である。「髭がそよそよと伸びるのが肉眼でも判る」と、冗談としか思えないような言葉を信じた菊ちゃんは、だまつてしやがんで相手の顎を注視する。その信じがたいような仕草を、主人公は「無智」なのか「利発」なのかと考え込む。しかし、相手を「信じ」て「てんから疑はない」で「安心してゐる」少女の（純真）を思い、

「信じる」という小説にすべきだと言う。「つまらない小説だね」というのは、実際には、素晴らしい小説になると信じている主人公のイロニーである。主人公は、菊ちゃんの（純粹性）を讀んでいるのである。当時にあつては些細な職業の給仕の少女ではあるが、その精神は（純粹）で（高貴）でさえあるのである。

店で働く女性は、「彼は昔の彼ならず」のマダムや「逆行」の「盗賊」の女給、「葉」の芸者や踊子、「めくら草紙」の芸者、「創世記」のマダム、「HUMAN LOST」の売春婦等多彩である。「逆行」のふとつた女給も「薔薇」が好きと言い、「葉」の踊子の「女の子」も、売りつけた花がしほんでいるのを案じて、「咲クヤウニ、咲ヤウニ」と一心にお祈りをする。又、「彼は昔の彼ならず」のマダムも色が抜けるように色「白」で、「白」い歯を見せ、笑いながら会釈する等「ダス・ゲマイネ」の菊ちゃんのように「明る」く（清潔）なイメージで描かれている。さらに「HUMAN LOST」の売春婦も母の代理として造形されている。卑賤な職業であつても、（聖）なるイメージで描かれ、最悪の職業である売春婦でさえも「母」にまで昇華されているのである。

女中等の奉公人は、「思ひ出」や「狂言の神」に見られるだけで、その数は少ない。

むすびに

以上のように、前期の女性を考察してきたが、それらの女性でまず目立つのは〈異類〉の女性である。昔話伝承の地である津軽出身の太宰治は、祖母や叔母、奉公人により、昔話や童話、芝居、幻灯、活動写真などを吸収するという、土俗的かつ芸術的、文化的雰囲気の中で成長した。そのこともあって、幼少期から自然にそれらに親しみ、フオークロアの作品を生みだしたと思われる。特に「魚服記」には、柳田国男の『山の人生』や『遠野物語』の影響が深いと思われる。そこには、農耕民とは隔絶された野性的な女性の姿も見られ、裸身の〈山女〉や赤茶けた縮れ毛の〈妖怪〉等と表現されている。又、それらの女性に共通するのは、〈臭い〉と叙述されていることである。山里離れた〈異界〉の住人と区別するときを使う表現のように思われる。「陰火」の「厄」は津軽北端、恐山の〈巫女〉を想起させられる。〈異類〉の女性は『晩年』を中心とした、前期の作品に際立つて多いのが特徴である。

続いて、〈傷〉つく女性もこの期の主なモチーフである。特に〈貧し〉く〈卑し〉い育ちの〈田舎〉の娘にその傾向が見られる。〈劣位〉の女性ゆえに、特権階級や身持ちの悪い男に弄ばれ、〈汚さ〉れ、捨てられる。しかし、それらの女性は全て、〈純粹〉で「優しい」心使いの出来る〈聖〉なる女性である。〈劣位〉の女性であってもその精神においては〈高貴〉そのものである。

前期の女性の母親像は最初から母不在の作品が多く、存在してい

も、直ぐに病没してしまうような希薄な存在の女性が多い。「魚服記」等は最初から父子家庭であるし、「ロマネスク」の「嘘の三郎」や「虚構の春」の母親も、息子に遠慮しながら命を縮めてしまう。「誕生」の母や「葉」の母も病没してしまう。「思ひ出」の母親は、存在はするが、その機能は果たしてはいない。母不在による〈悲劇〉がこの期の主題だったのであろうか。

一方、水に〈沈む〉女性も作品の随所に見られる。これは、太宰治がこれまでに度々自殺・心中未遂を起こしたことに起因すると思われるが、「道化の華」は鎌倉心中未遂事件を素材にしていると思われる。同じモチーフは、「狂言の神」や「虚構の春」にも見られ、「有夫の婦人」として造形されるが、これらの女性もやはり、「知」的で精神が「高潔」で「ノオブル」でさえあると叙述されている。

〈永遠〉の母親像は、「思ひ出」の叔母や姉、「めくら草紙」のマツ子の母親、「道化の華」の患者の母等に見られるが、〈優し〉くて〈上品〉な母像はあまり存在しない。「思ひ出」の叔母や姉は叱られ親しめない母の代理として打ち出されてくるが、これは中期の「新樹の言葉」のつるや「津軽」の〈永遠〉の母のたけに通じる母親像である。

〈下層〉の女性は、太宰治作品では四十一人にのぼり、全体の約半数を占めるが、印象に残る表現は、〈無学〉、〈貧しい〉、〈卑しい〉等である。それらの女性は主に津軽出身の〈田舎〉の娘である。「葉」等には〈無学〉の愚かな母親像も散見するが、娘であっても母親であってもその精神はあくまでも「清澄」である。〈下層〉の中で、店で働く女性、「ダス・ゲマイネ」の菊ちゃんなどは、「菊ちゃん」などと

愛称で呼ばれているし、「信じる」という小説でも書けそうな〈信頼の天才〉というような描かれ方をしている。後期の『人間失格』では、唯一葉蔵の妻になり得た〈信頼の天才〉のヨシちゃんに通じる女性像である。又、「彼は昔の彼ならず」のマダムも〈清潔〉で「明る」く描かれている。「HUMAN LOST」の淫売婦等は最も卑賤視された女性ではあるが、豊かさを誇る「母」にまで昇華されている。

以上のように、前期の女性性は、〈異類〉の女性や〈傷〉つく女性、〈死〉ぬ母や〈永遠〉の母、〈下層〉の女性が頻出しているが、彼女らのおかれている環境は〈劣悪〉である。しかし、その精神はどこまでも〈美しい〉。太宰は〈辺境〉の〈劣悪〉の女性に、しかも十代の女性に多く視点を注いでいるが、その精神はむしろ〈高貴〉でさえある。太宰治は、女性の比類無い〈美しさ〉は、外貌にあるのではなく、〈精神性〉にあるということを主張しているのである。

注

- (1) 浦田義和『太宰作品と「女性」——初期を中心として——』（昭和文学研究）第三三集平八年
- (2) 『日本地理風俗大系』（4 昭四年 「津軽」 7—44—46）
- (3) 山崎敏夫『93民族民芸双書 東北の山岳信仰』（昭四八年 第一法規出版）
- (4) 「禁忌の女性」とは、死者の魂を呼び、口寄せをする巫女「イタコ」のような女性。
- (5) 鈴木敏也『新註雨月物語評釈』（精分館書店、昭四年）の「夢応の鯉魚」参照。
- (6) 「海豹通信」第七便 昭八、二、一一）

(7) 柳田國男『定本 柳田國男集』（第四卷 昭四二年 筑摩書房「山民の生活」）による。

(8) 柳田國男『定本 柳田國男全集』（第九卷 昭四四年 「鬼の子孫」）

(9) 柳田國男『定本 柳田國男全集』（第四卷 昭四二年 筑摩書房）

(10) 柳田國男『定本 柳田國男集』（第四卷 昭四二年 筑摩書房「妖怪談義」の内の「かはたれ時」の項）

(11) 柳田國男『定本 柳田國男集』（第十五卷 昭四四年 筑摩書房「通婚」の項）

(12) この場合の「禁忌」とは忌むべきものとして禁ずる意に用い、「黄昏」時は識別できない危険な時であることを示す。

(13) 柳田國男『定本 柳田國男集』（第九卷 昭四四年 筑摩書房「巫女考」）

(14) 川端康成『川端康成全集』（第二卷 新潮社）

(15) 『太宰治事典』（別冊國文学 東郷克美編 学燈社）の（自殺／心中）の項参照

（あおき きょうこ 文学研究科国文学専攻博士後期課程）

一九九九年十月十五日受理